

将棋界変えたかもしれぬ天才

まだ中学生の藤井聡太さんが、プロ棋士としてデビューして以来29連勝を続けて、歴代1位の記録をつくった。そのためか、ときならぬ将棋ブームが生まれたが、将棋の世界では特別の能力を持った逸材が常に輩出される。8月、そういう逸材について考えてみた<保阪正康さん「特攻は日本の恥部、美化は怖い」>

私はもとより将棋は門外漢で、へぼ将棋に熱中する程度である。しかしそれぞれの棋士が歴史にどのように振り回されたかは興味がある。

たとえば棋神と評された坂田三吉は、長男の義雄が応召して3日後に南方に向かう輸送船に乗り込んだが、アメリカの潜水艦に撃沈されて戦死した。そのことがどうにも納得できず、坂田の死期を早める結果になったという。義雄は大阪の北野中(現北野高)から神戸高等商業学校(現神戸大)に進んで首席で卒業し、今の東京海上日動火災保険の社員になった。坂田にとってはこの息子の存在がなによりも励みだったのである。

一般的にといっていいのだが、棋士はさほど体力に恵まれているとはいえず、兵士として徴用された例はあまり多くない。たとえ戦争末期に召集されたにしても衛生兵であったり、事務を執ったりというケースが目立ち、前線での戦死は限られている。

木村義雄の「将棋一代」によると、戦後になって棋士仲間が集まってみると、「戦災で亡くなったものは一人もなかった。ただ戦場では一人関口慎吾六段が南方で戦死し、国内では和田庄兵衛六段が疎開先で病死した」という。確かに戦死した棋士は、この関口六段を含めほんのわずかだった。そのことで逆に、関口の死が棋士仲間から惜しまれるかたちになったといえる。

関口六段については、さほどくわしく知られていない。戦史研究家で、特攻作戦に関わる著作を持つ渡辺大助氏は、この関口をずっと追いかけている。なぜ闇に包まれているかは、棋士仲間に戦場体験を持つ者が少なく、調べる方法を知らなかったからといえるようだ。私自身、渡辺氏の集めたいいくつかの資料を読ませてもらったり、この世界に通じている人たちから話を聞いたりして、関口が存命していたら、戦後の棋士の世界は変わっていたことに気づいた。

大山康晴もその著(「昭和将棋史」岩波書店)で才能を認めている。

「東京に関口慎吾という、大器と見られていた同時代の仲間がいたけれど、南方に連れていかれたまま、消えてしまった。(略)後年、升田(幸三)さんや私がプロ棋界を

制覇する勢いがあったとき、東京の仲間たちが、『関口さんが健在でいたらなあ』と、くやしがる言葉を何度か聞かされた」

大山、升田の2強時代に関口が割って入り、3強時代が演出されたと当事者たちからも認められていたのだ。むろん、関口の棋譜を見ても現代風とはいえないが、戦前の棋士仲間からは天才とか大器といわれていた。

この幻の天才棋士と評される関口慎吾は、大正7(1918)年4月に東京・下谷区入谷で生まれた。昭和の初め、下谷高等小学校在学中に将棋をおぼえたという。当時の雑誌「将棋世界」によると、昭和9(34)年春に六級で清交会に入り、11月に四級で斎藤銀次郎七段の内弟子となる。新進棋士奨励会に入ってプロの道を歩む。昭和12(37)年5月に二段、以後順調に昇段して、その後は13勝4敗で五段となっている。その将棋について木村義雄は、「筋のよい上によく勉強し、天才的な俊英として将来を囑目されていた」とも書き残している。

関口は昭和15(40)年の五段時代に召集令状を受ける。「戦争はいやですね。人間同士が殺し合うなんてまったくバカげています」と漏らしながら、中国に出征していった。昭和16(41)年2月の「将棋世界」には、関口の「前線便り」が掲載されている。体力がなく1局対局すると回復に3日間必要といわれていたのに、すっかり皇軍兵士らしくなったと記者は紹介している。衛生兵として傷病兵の看護にあたっているというのだ。

関口は将棋仲間の会(大成会)に封書を出すこともあったが、絵はがきが入っているだけで、文字が書いていないこともあった。関口なりの抵抗だったのか。

その後太平洋戦争に入ると、関口は再び応召し、ニューギニア戦線に送られた。そして昭和20(45)年2月に戦死している。26歳だった。しかし戦死の状況は一切分からない。前述の渡辺氏は関係者や遺族を求めて調査を続けているというが、元隣人から「少年時代から将棋の駒を盤に並べて研究していた」との証言を得た程度。関口の弟も戦死しており、遺族も不明で関口の苦悩など詳しいことは分からない。

とはいえ、幻の天才棋士の実像だけは語り継ぎたいという将棋ファンは多い。盤を神経質に見つめたその目は、戦場でどのような光景を見たのであろうか。そのことを私もまた確かめたいのである。